

第四編

《教育座談会》

次代を担う安房の子どもたちの豊かな成長を願って

本年4月から全国の小学校・中学校において、新しい学習指導要領の一部が先行実施された。現在、各学校では、地域に根差した教育課程の実施に向けて取り組んでいるところである。

今日の少子高齢化、国際化・情報化の進行など、社会が大きく変化している中、教育においては学力の低下が懸念され、また、豊かな心と健やかな体の育成、職業への理解と働く意欲の向上、ルールやマナーを大切にする意識の育成、いじめや不登校への対応など、解決すべき多くの課題がある。そして、その教育の中核となる学校では、団塊の世代の大量退職を迎え、これからの10年間で、教職員の半分近くが入れかわることとなる。

こうした中で、安房の教育の良き伝統を引き継ぐとともに、目の前の子どもたち一人一人のニーズに対応した教育の推進や、家庭や地域と一体となり、地域に即したきめ細かな教育を推進していくことがより一層求められている。そして、次代を担う、心身ともに健康で夢と希望を持ち、たくましく未来をきり開いていく「安房の子どもたち」を、みんなで育てていく環境づくりを推進していくことが急務となっている。

そこで、本年度の教育座談会は、学校自らがその特色を生かし、より一層地域に根ざした教育の充実方策を明らかにするため、テーマを『次代を担う安房の子どもたちの豊かな成長を願って—これからの学校の在り方について—』と設定し、本日それぞれの立場でご活躍されている5名の方々をパネリストとしてお迎えした。座談会では、「安房地域や学校の現状と課題」「次代を担う安房の子どもたちに身に付けさせたい力」「学校の果たすべき役割や教職員に期待すること」等について大いに語っていただく。

先日、プロ野球クライマックスステージで日本ハムに敗れ、退任が決まった楽天の野村監督が両チームの選手から胴上げされた。試合後のインタビューでは、「縁を持った人がユニホームを着て頑張っているのは喜ばしいこと。人間何を残すか。人を残すのが一番」と述べていた。この言葉は、正に教育が目指すところである。

この座談会が、次代を担う安房の子どもたちの成長に向け、学校・家庭・地域社会がどのように連携し、指導・支援していくかについて考える機会となればと願っている。

パネリスト	伊藤 昭 様	(千葉県立安房拓心高等学校校長)
	青木 寛子 様	(千葉県立長狭高等学校教諭)
	加藤 文男 様	(南房総市役所企画部部長)
	三瓶 雅延 様	(沖ノ島サンゴを見守る会代表)
	芳賀 裕 様	(丸山地区青少年キャンプ実行委員会事務局長)
司 会	吉田 貞子	調査研究部主事
	館石 悦子	教育研修部主事

教育座談会記録

石井所長：皆さんこんにちは。本日はお忙しい中をご出席いただきましてありがとうございます。教育座談会の開催に当たり、主催者といたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

さて、今の学校現場ではインフルエンザが猛威をふるっており、子ども達の音楽会中止や授業の教育課程をどうするかで頭の中が一杯でございます。そのような中、教育界では第三の改革として教育基本法が改正されました。そして、本年度から学習指導要領が一部先行実施され、教育界の話題は、国際学力状況調査の結果からも分かるように「学力低下にどう対応するか」が大きな課題となっております。

私どもの安房教育研究所は、昭和39年、当時県内唯一の地域の教育研究所として設立され、目の前の子どもの姿を見つめ、その中に見出した諸課題に対して、調査・研究・研修を深め、課題解決に迫り、その成果を学校に還元していく活動を継続しております。

当研究所は、調査研究部、教育研修部、情報部の3つから構成されており、調査研究部では、昨年度から「より好ましい生活確立のために」のテーマで取り組み、本年度はサブテーマを「小中の接続を滑らかにするための有効な手立てを探る」とし、その解決策の提言に向けて実態調査をもとにした研究を進めています。

また、教育研修部では、昨年度から「思考力を高める学習指導のあり方」のテーマで取り組み、本年度はサブテーマを「書く」「話す」活動を通して」とし、「書く」「話す」活動から思考力育成に視点を当てて研究を進めています。

そして、情報部では「情報収集の場としての研究所HPの活用の方策を探る」をテーマとし、研修に取り組んでいます。

本日は、「次代を担う安房の子どもたちの豊かな成長を願って」と題し、これからの学校の在り方について、教育座談会を開催いたします。

私どもの研究活動をさらに深め、研究を推進していくためにも、各界でご活躍の方々を交え、論議を深めていきたいと思います。

特に、パネラーの皆様の話聞くだけでなく、是非、フロアーの所員や参加者の皆様にも座談の

輪に入り、活発な議論が展開されることを期待しております。

なお、この座談会の内容ですが、研究紀要にまとめ各学校・教育機関に配布するとともに、当研究所ホームページから全国に発信されることを申し添えまして、主催者挨拶にかえさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

遠藤：パネリストの皆様をご紹介します。

千葉県立安房拓心高等学校校長 伊藤 昭 様
千葉県立長狭高等学校教諭 青木 寛子 様
南房総市役所企画部部長 加藤 文男 様
沖ノ島サンゴを見守る会代表 三瓶 雅延 様
丸山地区青少年キャンプ実行委員会事務局長 芳賀 裕 様

司会は、調査研究部主事 吉田貞子、教育研修部主事 館石 悦子です。

遠藤：本日は、「次代を担う安房の子どもたちの豊かな成長を願って—これからの学校の在り方について—」のテーマのもと、様々な分野からパネリストの皆様が安房教育研究所 教育座談会に参加してくださいました。まず、はじめに私より、問題提起をさせていただきます。

さて、本年4月から全国の小学校・中学校において、新しい学習指導要領の一部が先行実施されました。現在、各学校では、地域に根差した教育課程の実施に向けて取り組んでいるところです。

千葉県は、タウンミーティングやミニ集会、中高生交流会等、延べ10万人の県民の熱い議論から生まれた「千葉県教育の戦略的なビジョン」を策定しました。学力向上やいじめ問題など、多様な教育課題に的確に対応し、千葉県の未来を担う子どもたちの育成にみんなで取り組む中長期的なビジョンです。このビジョンのキーワードとなっているのが、1「地域とともに歩む学校」、2「未来を拓く『ちばっ子』の育成」、3「豊かな学びを支える教育環境の整備」の3つです。また、「みんなで取り組む千葉の教育」では、1「社会の中で個性が輝く『人間力』の育成」、2「家庭・学校・地域連携による教育力の向上」、3「豊かな学びを支える教育環境の整備」、4「子どもたち一人一人の教育的ニーズに対応した特別支援教育の推進」です。今日の少子高齢化、国際化・情報化の進行など、社会が大きく変化している中、教育においては学力の低下が大きな問題となり、ま

た、豊かな心と健やかな体の育成、職業への理解と働く意欲の向上、ルールやマナーを大切にする意識の育成、いじめや不登校への対応など、解決すべき多くの課題があります。

現在、教職員は、団塊の世代の大量退職時代に突入し、これからの10年間で、教職員の半分近くが入れかわることとなります。こうした中で、私たちは、安房の教育の良き伝統を引き継ぐとともに、目の前の子どもたち一人一人のニーズに対応した教育の推進や、家庭や地域と一体となり、地域に即したきめ細かな教育を推進していくことがより一層求められています。そして、次代を担う、心身ともに健康で夢と希望を持ち、たくましく未来をきり開いていく「安房の子どもたち」を、みんなで育てていく環境づくりを推進していくことが急務になっています。

そこで、本年度の教育座談会は、学校自らがその特色を生かし、より一層地域に根ざした教育の充実方策を明らかにするため、本日それぞれの立場でご活躍されている5名の皆様をパネリストとしてお迎えしております。

座談会では、「安房地域や学校の現状と課題」「次代を担う安房の子どもたちに身に付けさせたい力」「学校の果たすべき役割や教職員に期待すること」等について大いに語っていただきたいと思えます。

先日、プロ野球クライマックスステージで日本ハムに敗れ、退任が決まった楽天の野村監督が両チームの選手から胴上げされた。試合後のインタビューでは、「縁を持った人がユニホームを着て頑張っているのは喜ばしいこと。人間何を残すか。人を残すのが一番」と述べていました。この言葉は、正に教育が目指すところです。

本日は、ぜひ忌憚のない御意見を頂戴し、この座談会が、次代を担う安房の子どもたちの成長に向けて、学校・家庭・地域社会がどのように連携し、指導・支援していくかについて考える機会となればと願っています。以上で問題提起とさせていただきます。

吉田：ただ今、主任主事の遠藤より問題提起がありました。はじめに柱1「安房地域や学校のおかれている現状と課題」ということで、パネリストの皆様からお話をいただきたいと思えます。まずはじめに伊藤 昭校長先生からお願いいたします。



伊藤：よろしくお願ひします。柱1の前に安房拓心高校の話をしていただけたらと思います。うちの生徒は450人いますが、ほと

伊藤 昭様 んどが安房の地域から来ています。だいたい1年生はどここの学校とも同じように、普通教科を中心にやっています。2年生から、文理、園芸、畜産、土木、調理の5系列に分かれます。農業高校のイメージが強いかもしれませんが、普通高校と同じ勉強をする文理コースも頑張っています。調理系列は卒業時に調理資格も取れます。うちの高校ではいろいろなものを作っていますが、今日、職員にうちで作っているものを1つ2つお願いしたところ、あれやこれやといっぱい持ってきてくれました。少し紹介します。まず、みなさんが持っている、パン類、ヨーグルト。これは富浦と三芳を除く南房総市の小・中学校の給食センターに送り、子どもたちの学校給食で出しています。うちは40頭の牛がいますから、それで作ったヨーグルト。味噌、ジャム、あとは生ハム、シクラメンなどの花、サイゼリア、パンジー、あと野菜類は万能ねぎ、サニーレタス、かぶ、ほうれんそう、サンチュ、トマト、メロン。こういうものもつくっています。余談ですが、幼稚園児や小学生がよく遠足に来てくれています。本校にいる動物はダチョウ、孔雀、牛、うさぎ、山羊などです。ある小学校の校長先生が言っていましたけど、今まで遠足だと鴨川シーワールドに行っていたそうですが、シャチやイルカに飽きてしまったそうです。意外とシャチやイルカよりも山羊や牛のほうが珍しいのではないかと思います。

本題に戻りますが、地域の現状、子どもたちの現状ですが、どうしても出てくるのは少子高齢化です。高齢化というとマイナスの雰囲気があるのですが、私も和田中で2年勤めさせて頂いて、本当に高齢者のパワーを感じました。親が働いていると、子どもの忘れものや何かの行事にはじっちゃん、ばっちゃんが来てくれる。そういう力があります。和田中の話ですが、中学校の職員は数が少なく、人手不足なので、例えば地域の人や高齢者を含めてボランティアを集められないか。学習支援ボランティア、図書館ボランティア、読

書ボランティア等々回覧板でまわしたり、支所、ふれあいセンターにポスターを貼ったり、ビラを配ったりして、結構人が来てくれました。例えば都会からこちらへ移住してきた人達は、図書館ボランティアでは東京の中学校の先生やっていた図書司書をやっていた人が来てくれました。和田中の図書館の管理は3学年主任がやっていたので、本当に大変だったのですが、その人が非常によく本の整理をしてくれました。あと学習支援でも年配の方を含め、力を貸してくれました。だからそういう人々の力をどのように学校に活用するかがポイントではないかと思えます。次に色々な地域活動が盛んに行なわれている中で、学校と地域で活動をしている方々との結び付きは学校がもっと働きかけてもいいと思う。例えば理科の話をすると、地域の社会教育で海辺の生物を見たり、探したりという体験をすると、理科の教育に結び付き興味・関心も高まる。そうすると理科の授業で生物の勉強をしたときに、地域の体験活動の成果から、興味・関心がさらに高まります。学校が地域の活動に前向きに関わるようになり、さらに活きた学力がつく。やる気、意欲は今回の学習指導要領のキーワードにもなっていて、やる気は、社会、地域、家庭でも喚起していける。最後に生徒の現状で気になることを申し上げます。それは和田中で、生徒の実態についてアンケートを実施した際に、『自分の良いところはありますか』という質問に『あると思う』と答えたのが37.3%、『あると思わない』が23.7%、『わからない』が39%でした。自分自身の良さとか気づけなかったら自信が持てないことが気になりました。

吉田：ありがとうございます。学校が地域の活動にもっと関わっていく必要があるのではないかと、そこから意欲が湧いてくるような子どもが育つのではないかと。しいてはそれが学力に結びついていくというお話でした。子どもの課題としては、良さに気づけない子どもが多いということでした。では続きまして、長狭高等学校の青木先生お願いします。

青木：よろしく申し上げます。先ほども出しましたが、少子高齢化の話が出ましたが、私は生徒数の減少、公立高校離れが最近の問題になっています。長狭高校はここ数年定員割れが続いています。それは人気がないからという訳ではなく、地域の子



青木 寛子 様

どもが、地域に残っていないと、いる子どもたち（木更津や君津に流出しないで）安房地区に残っている子どもたちを全部合わせても公立高校の定員に満たない部分がありまして、定員と子どもの数が合っていないというのが現状です。その中で何とかして集めようとはしているのですけれども、どうしても定員割れを起こしてしまう。それで、私立高校の巧みな生徒募集ですね。「本当に君は素晴らしいですね。是非うちの高校に来て勉強して欲しいな」私立高校の先生から「授業料も免除だよ」と言われてしまうと、親も子どももその気になりますし、また「バスがありますし、交通費もかからないよ、授業料もかからないよ、だからうちで勉強しようよ」と誘われて、私立の方へ流れてしまう部分があると思います。もう一つ本校の定員割れの理由に、ある高校は、全く学級減が無いということです。今までは入れなかった中学生がそちらの学校は学級減が無いので、入れてしまうという実情があります。どんどん私たちの学校は学級減となり、現在1学年5クラスです。私が長狭高校に赴任した時は8クラス規模の学校でしたので、そこから3クラス在職中に減ってしまいました。それに伴って、生徒の方も中学3年生に必死に勉強しないと高校に入れないという意識が全く無くなってまいりまして、学習に対する意欲が下がっている生徒が最近見受けられます。英数国の基礎学力が厳しい生徒も増えてまいりました。高校としては現状として、基礎力をつける。特に英数国の基礎力をつけることに力を置いています。しかし、またそこに問題が出てまいります。学級減がありますと、1クラス学級減があると学校全体の職員が2名減らなくてはいけないのです。3年連続定員割れが続いたことで、1年毎に学級減がありますと、次の学年で5クラスになり、もう1クラス減りますよね。そうすると3年経つと結果的に3クラス減ることになります。これにより学校全体の教職員が6名減ることになります。国語で一人、数学で一人、英語で一人というように減らしていくと、どんどんどん苦しい現状が実感されるような状態が現在の高等学校です。現在

は大学進学を希望する生徒が非常に多いです。大学も二極化で、有名私立はなかなか入れません。しかし、選ばなければ大学にみんなが入れる時代になって来ています。そこで、高校としましては、何とか大学で学ぶだけの力をつけさせなければいけないということで、進路指導が非常に大変になってきています。先ほど遠藤主事の方からもありましたけれど、千葉県の戦力的ビジョンの中にもありますが、思考力を育てる、表現力を育てる。これは「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の本当の基本的部分なのでですね。ここを育てることを目標にしているところです。現状と子どもたちの様子をお話しさせていただきました。

吉田：ありがとうございます。定員割れ、大学全入時代で進路指導も大変苦労しているというお話でした。続きまして加藤さんお願いします。



加藤：皆さんこんにちは。私は子どものころから学校が大嫌いでした、ここにあまり出てきたくないのです。先ほど伊藤先生が言って

加藤 文男 様 いた和田中の卒業生がそうだったのかということがわかりました。今南房総市が合併いたしましたして、10人定年いたしますと1割の補充率となっています。ですから20人辞めると2人採用します。実は和田出身の子が非常に多い。地域の方と一緒に取り組んできたというのが、こういうところにも出てきているのだという気がします。最近話す時があれば、言っているのですが、変化できない地域、変化できない組織は滅びる。これが確かなようですね。なぜ確かかという、これは私が言い出したのではなく、かの有名なダーヴィンがそう言っているから、確かなようです。それがダーヴィンの改革、人材育成に繋がったのかなど。その先例を伊藤先生が言っていたのかなど思っています。南房総市は7市町村が合併いたしましたして、かなり再編の波が来ています。職員がどんどん減っています。減っているというのは人口に一番表れています。1990年、今から20年前に南房総市に合併した7市町村の人口を合わせると51,000人でした。それが平成5年は44,000人。人口推計すると平成25年には36,000人に落ちる。ですから1990年から35年間

で0.7になってしまう訳です。お陰様で元気なお年寄り人口は増えておりまして、1990年は22%ですが、平成25年には44%になります。一般的に高齢化比率が50%を超えると、原価衆力の要点の1つになってしまいます。原価衆力はマスコミが大きく扱い過ぎて、もっと色々な要件があります。ただ1つ言えるのは、お年寄りがどんなに頑張っても、汗を流していても、やはり若い人達の効率にはかなわないという気がしまして、元気なお年寄りが増えていくことは悪いことではないのですが、若い人を残す仕組み自体をつくっていけないのかなと思っています。ただこの地域に若い人がこの地域にいないからというのははっきりしてまして、公務員になる道がけっこう閉ざされてきたって、公務員が1人であれば、4人ぐらいは落ちるわけで、就職の場を何とかしなければいけないかなと思っています。唯一今年に入って、思い切って政策を打ったのは、南房総全てで何とか200メガの光ファイバーを市で引こうと、山の中の1軒屋でも、海辺の1軒屋でもそこに住んでいる人たちにも光ファイバーの恩恵を受けられるようにしよう。これは積極的な手なのかわかりませんが、遺失利益を減らす。それが無かったために、失ってしまう利益があるわけで、光ファイバーを引かなかったことによる遺失利益を無くそうということで、始めています。ただデジタル化した時に、どんなもんかという、それを活用していく地域の能力になって行くわけなのですが、ちょっと心配しているのは、以前から言われているように、子どもたちがデジタル化し過ぎてしまっていて、色々なルールがあるそうですね。メールが着たら何分以内に返さなければいけないとか、それから私の甥もゲームセンターに勤めていまして、独立してゲームのソフトウェアをつくる会社を興したりしているのですが、こんなものをつくって掌で子どもを遊ばせるだけだろ、「おじさんこれが楽しいんだよ、これがいいんだよ」って言うのです。生きていく力というのは、なぞる力、ゲームソフトでいえば、ゲームソフトを設計した人達の意図通りに、物事を動かしていく仕組みを頭の中で構築しているような能力を育てるような気がして、これは大変だな、これはなぞっていけば過ぎていく時代というのは、おそらく日本においては、「終わった」それでは日本の国が維持できないような

気がします。では様々な子どもたちの発想をどうやって、育てていくかという、自分の人生振り返ってみても経験したことからしか発想できない。経験、知恵もいただいたりとかして、経験値の中でしか自分論理が組み立てられないというような、分野を自分は考えているのですが、そういう目でゲームとか携帯とか、ある面学校でなぞることによる、静観主義というか、成績主義というか、それについて、日本ってどうなってしまうのかなと今考えてしまうということです。まあ和田のように、地域力が信用できる学校というのがあれば、子どもたちも体験の幅が広がられるよなというのが私の思いです。

吉田：ありがとうございます。現在私たちが大変危惧していること、経験値で子どもは育っているということなど、地方行政の立場から貴重な御意見をいただきました。次に三瓶先生お願いします。



三瓶 雅延 様

三瓶：私は先生ではございません。私は現場の人間ですから、話は単純になってしまいましたが、海ホテルの観察会を通して感じたことをお話しします。

私は子どもたちにもっと地域の自然や文化にふれてほしい、教えるだけではなくて、実際にふれてほしいなど、そう思っています。海ホテルの観察会を通してなんですけども、海ホテルは館山の観光資源、館山だけではなくて安房の観光資源として、わたしたちはボランティア活動を行っています。アクアラインが開通した年に館山海ホテル観察クラブを組織してボランティア活動してきました。今年初めて、先月10月に館山市の小学校で初めて大房少年自然の家で那古小学校さんの5年生に頼まれて海ホテルの観察会をやりました。そこで、海ホテルを実際に見たことがある子に手を挙げてもらったら半分以下でした。それで、その前に地元の館山小学校の5年生に、これは先生が話したのですけれども、館山小学校は35人5年生がいて、海ホテルを知っている生徒さんが7人だったそうです。5分の1ですよ、5分の1！私たちは10年近く館山で海ホテルの観察会をボランティアで活動してきました。それで那古小学

校さんの生徒さんは半分近くなので「やっぱり少しは浸透してきたなあ」と感じ、そして二人の生徒さんに「どこで見たのですか」と聞いたのです。そうしたら一人の男の子が「アクアラインで海ホテルを見ました」と言いました。それから、もう一人の女の子は「テレビで見ました」と答えました。私は心の中でのけぞってしまいました。なんで、地元の海ホテルを見ていないのか。それで、子どもたちにぜひ地元の自然を教えて欲しい、そう思いました。それと、ついでに那古小の生徒に、観察会が終わった後話をして、その中で「海岸清掃に参加された方は何人くらいいますか」と手を挙げてもらいました。そうしたら、だいたい5分の2くらいでした。

私は本当、地域の子子どもたちには、先ほど伊藤先生もおっしゃっていましたが、地域のそういった活動にもぜひ参加させてやっていただきたいなってそう思います。また、やはりふるさとを思う気持ちが子どもたちにとっては大人になる時に本当に大事だなって色々な活動を通して思っています。

吉田：ありがとうございます。地域の自然をよく知らない子どもたちに、地域の自然にふれること、関わるのが大切だという話でした。つづきまして、丸山地区青少年キャンプの実行委員の芳賀様、よりしくお願いします。

芳賀：こんにちは。私は都市部での子育てに限界を感じまして、子どもがどういった環境で育ったらいいいのかと思って、ずっと20カ所くらい探して、和田浦の宮野大浦が気に入って、その近くの山に住もうということで丸山に引っ越してきました。それからもう18年がたちました。こういう環境で子どもを育てるにはどういうことが必要かということで取り組みを色々やってきました。試行錯誤もあるのですが、やってきた内容についてここで話をしたいと思います。

一つめ、私の今日の肩書きでもあるのですが、丸山地区の青少年キャンプです。他の地区でやっているキャンプと若干違っていて、小学5年生から中学2年生まで、希望者を募集する参加体系になってとっております。小学5年生から中学2年生までの4年間をずっと継続してみたいということで、39回を数えます。それで小学5年生の時にはまだ弟役、妹役だった人たちが、



芳賀 裕 様

中学1年，中学2年になってお兄さん，お姉さんの役割を果たしていく，そういう姿をぜひみたいということでやってきました。最初はどちらかというと，大人の方が接待的なキャンプをずっとやってきたのです。いわゆる上げ膳据え膳のようなキャンプをやっていると，子どもたちの感想は「こうしてほしかった」「ゲームが欲しかった」そういうものしか出てこないのですね。だんだん私も考えて，もっと体験型にしていこうと，それから自分たちで工夫ができるような，上げ膳据え膳ではなくて，工夫をしなければたっていけないようなキャンプをやっていききたいということで相談役になりました。それから育成会の方で色々話し合っただけでやってきました。特に我々の課題は常に生きる力をアップさせるということをやっていますので，評価としては，子どもは楽しかったかどうかというよりは，また来年も来たいという気持ちをどういう風に引き出していくかというのを一つの評価にしています。

それから私，丸山地区，安房のほとんどと関わりを持っていないのですが，丸山中の移転に伴いまして，旧丸山中のグラウンドが遊休状態の運動場になっていますが，遊休な扱いになっています。夏に行くと草ぼうぼうで，ちょっと人が入れるような環境ではないといった状態です。それでそこを，ぜひうちのキャンプで使いたいということで，昨年，今年と2回やりました。これは自前のキャンプ場を持たないかということで，もう10年くらいのスパンでずっとやってきました。たまたま丸山中のグラウンドが空いているということで，そこを有効活用という名目でやろうとした。やるまでにはだいたい3年くらいかかりました。ここには行政的な壁がありまして，そういう提案をしても「だれが責任を持ってくれるんだ」とか，どこがやれるのかってことに対する壁がありました。そこに対しては「我々が責任を持ちますからやらせてください」ということを，2，3年かけてやるということを伝えました。そこに行政の穴があけられたというのが現状です。当然，遊休状態なので，いろいろな面で悪条件ですけど，

自分たちでワーキングキャンプ的な自分たちで作っていくようなキャンプをしていけば，やがて自分たちのキャンプ場だというような意識が湧いてくるであろうと，そしてそれは地域の活性化につながるであろうとっております。それで2，3回変わってNPO化して自分たちが本当にイメージできるものにしていきたいというものがあります。

それからもう一つ実践例では，ここに何人かいらっしゃいますけど，丸小学校の「納涼の夕べ」というのがありまして，これは第27回を数えます。これは地域のおじいちゃん，おばあちゃん，それから子ども，孫含めて，3回つどう集まりです。これに関してはだいたい2回くらい実行委員会が集まって，だいたい600人くらいの規模の集会というようなつどいになっております。

これも初めは子どもたちがお客さんの扱いだったのですが，高学年になるとお店屋さんに参加させるということで，だんだんと変わってきました。中学校にいても，高校に行っても，自分たちが後輩を連れてくるということで，自分たちのものになってきているのが特徴かと思えます。まともありませんが，地域での活動というのは，やはり実践型・体験型でやっていかないと長続きしないし，ずっとエネルギーを使いすぎると，みんな疲れてもう嫌になってしまいますから，いかに楽な形をすすめていくかがコツかなあと思っております。以上です。

吉田：ありがとうございます。キャンプを通してということで，接待的なキャンプから工夫するキャンプへということ，付け加えて活動は常に先を見通して，次はどうしたいということを見据えてやっていくというお話でした。

それでは5人のみなさまから大変貴重な第1の柱，それぞれの取り組みからみた地域や学校，子どもたちの現状と課題というようなこととお話をいただきました。それでは柱2へ移らせていただきます。

伊藤：まず，子ども達に身に付けさせたい力は，我々の生活や産業社会を支えてきた「物づくり」の力です。世の中の物は全部作られた物ですよ。私は普通高校が長かったので，拓心高校にきて，物づくりの子ども達の活動を見て再認識しました。私自身が頭でっかちの人間ですからなおさらそう

感じます。物を汗水たらして作るという経験、前向きに取り組む生徒やそういう力を育てたいです。例を出しますと、我々の高校には畜産部というのがあります。畜産部には男の子も女の子います。そして、元旦・土日・雨に日でも、嵐の日でも彼らは来ます。そして、何をやるかというとうんちの掃除、牛舎の掃除、ワラの交換、えさやり、そして肥料にするために牛糞を運ぶんですね。なぜ、彼らが元旦の日でも来るかというと、自分たちが来ないと牛たちが困るなという思いがあるのです。愛着も湧くし、牛乳をいろんな所に出荷するというので本当に頭が下がります。「物づくり」という人類の生活に影響を与えるような子ども達を育てたいと思います。

もう1つは、今までも話がありましたが、「郷土を愛する気持ち」やっぱり、地域を支える人を作っていきたいと思います。本校では、地元への定着率、地元に残る人が多いのですが、そういう意味では地域を支える人は育ってきていると思います。しかし、20年後、30年後の安房を見た時に、農業・水産業に携わる後継者不足がとても心配です。安房の地域の産業がどうなるのだろうかと考えとなおさらそう思います。

あと簡単な事ですが、「掃除する力」を付けたいですね。「掃除力」ゴミが落ちていたら進んで拾えるような人間を育てたいと思います。そのために職員一同、私も含めて全部生徒と一緒に掃除をやって、その力を付けられるように取り組んでいきたいと考えています。

あともう1つだけすみません。それは「学力低下問題」です。これは非常に大きな課題ですね。小学校の先生に色々聞きますと、だいたい自分が担任しますと、この子はこの時期にここ、例えば分数でつまづいているなというのがおわかりになるそうです。しかし、家に帰って2・3時間、お便りを作って色々な作業を毎日やって、あと子どもとも遊んだりしますので、何とかしたいなと思ってもなかなかそういかない所があるようです。色々一生懸命に小学校の先生はやってくれています。それは中学校の先生も同じです。私も中学校の経験がありますが、中学校は朝7時半から部活の朝練習があります。そして、担任の先生も含めて唯一あいている時間というのは生活ノートを書いている時間。そして、放課後部活をやって生徒

を帰します。本当に大変なのです。分からない子には少人数指導など色々やりますけど、やっぱりうまくいかない。分からないままに高校へ入って来るのです。高校に入ってくると数Ⅰ・数Ⅱ・物理・化学などやるのですが、分からない子はただ座っているだけの状況になるんですね。この前、子ども達に勉強の話をしてくれと言われアンケートをとった時、例えば1年生ですが数学・英語の基礎が分からない。分からないとおもしろくない、やるきが出ない、と悪循環になるのです。また、「わからない所をどう分かるようにすればいいのか分からない」と、何か川柳のようになっていますが、小学校の勉強が分かれば中学校の勉強は半分近くは分かるのです。大学に行けば大学に行ったで、分数が分からないという大学生がいるのか。小・中で一生懸命にやっても、分からないまま高校に来るのですね。そういった悪循環をどうやって断ち切るかが問題だと思います。それをどこでどうするのか。我々教師がどうするのか。私は、学校支援ボランティア等を活用して補習活動をやりました。高校でも何とかしなければならぬと思って、全職員でその子ども達の分からない点について、小学校・中学校段階までさかのぼって教えると、「分かった」「できた」という気持ちに必ず彼らの「がんばろう」という気持ちにつながって、よりよい成長につながると思います。色々話をしましたが、ありがとうございました。

吉田：ありがとうございました。「物づくり」「郷土を愛する心」「掃除力」「学力」が子ども達に付けさせたい力であるというお話でした。続きまして、青木先生、よろしくお願ひいたします。

青木：はい。「次代を担う安房の子ども達に付けさせたい力」ということで、それこそ千葉県の教育委員会のホームページに「ちばっ子」という言葉がよく出てまいります。「心身ともに健康で郷土を愛し責任ある行動」と「自己表現のできる子ども」これが、千葉県教育委員会が出しているところですよ。やはり、これが子ども達に一番身に付けてほしい力なんですよ。私も、千葉県の教育委員会のホームページはよく見させていただいているのですが、義務制の中学校・小学校の先生達はもっとそうだと思うんですけど、非常にいいところがいっぱいあって、高校では何ができるのかということをいつも考えております。

今、私が高校生に一番身に付けさせたい力は、担当している国語の授業の中でもやっているのですが、「自分の足で立つ力を身に付けなさい」ということです。自分の足で立つという視点から見ると、子どもたちは「自立する力」がかなり弱いですよ。子どもも少ないですし、親が何から何まで手をかけていますし、私から言わせてもらえば、小学校・中学校の先生がよくここまで手をかけて下さいましたという感じの子が高校に入ってきています。「先生これは？」「先生これは？」「先生これは？」と高校1年生で、ここまで1個ずつ聞かれてしまいますと、こちらはどうしましょうかというくらい「指示待ち」の子どもが多いのです。本当に指示を待ってからでないといけませんという子どもが増えてきました。君達はこの高校3年間で、とにかく自分の足で立って、そしてさらに、社会に出て将来自分で稼いで自分の生活を立ていける人間になりなさいと。それは、国語の授業の中の単元1つ1つにおいて、それこそ、芥川の「羅生門」をやりながら、下人の心理を問いながら、「どうするよ、君たちが下人だったら。」「自分で生きていくためにどうする？」というような問いかけを含めて、「自立できる自分」というものを意識させております。そこには、客観的に自分を見つめる力が必要となってきます。「今の自分に足りないもの」、「今の自分に備わっているもの」それをしっかりと客観的に見つめられる力を付けさせたいといつも思っております。

自分を知らない子どもが実感としてけっこう多いですね。今、私は進路を担当していますが、「これからは英語が話せた方がいいと思いますので英文科に行きたいと思います」と言う生徒が、3年生になるとさすがにおりませんが、1年生・2年生の時に「進路はどうする？」と面談をすると「英語の方に行ったら仕事もいっぱいあるとお父さんもお母さんも言うし、だから英語の方の大学に行こうと思います」「そっか、苦手な教科は何だっけ？」「英語です」ということがありました。そこから始まって「英語が好き？英文科。いいですね」「じゃ、君はまず何をやりますか？」と聞くと「えっ？」というような状態です。苦手でも入ったら何とかかなと思っちゃう部分もあるのですね。そして、「高校の先生がきっと何とかしてくれる」というところもちよっと見え隠れしております。

まずは、自分自身の向き・不向き、得意・不得意を意識させることですね。高等学校で何とか力をつけさせたいものは、「自分の足で立つ力」「自立する力」結果的に「見つめる力」というものを意識させたいと思っています。今私たちは、それを身に付けさせようと思ってがんばっております。

吉田：ありがとうございました。「指示待ち人間だ」というお言葉が、大変耳の痛い言葉でありましたが、これから気を付けていかなければならないことだと思っております。「自立する力」「自分で道を切り開いていくということ」そして、「客観的に自分を見つめる力」が大切だということで指導をされているというお話でした。ありがとうございました。続きまして加藤様、お願いします。

加藤：また、失礼な事ばかり言ってすみません。今までの100年ってどんな100年であったのかというと、戦争の100年だといえますよね。戦争ばかりやっていた100年だとNHKなどでやっています。今も戦争をやっていますけど。それでは、これからの100年はどんな100年だとみなさんはお考えになりますかね。

どうして、そんなことばかり考えているかというと、私は休暇を取って開発途上国の仕事を手伝うことが最近多いからです。前はタイで、今はベトナムに通っているのですけどね。経済危機を予測した経済学者が言っていたんですけれども、「これからの100年は賃金格差がうまる100年」だと言われているんでね。これは、東南アジアを歩いていて確かにそうだろうと思います。日本の年間の平均所得は、為替の変動で変わりますが平均3万ドルだと言われています。東南アジアの赤道の方は年間1,000ドル。1,000ドル以下が多いですよ。この格差が縮まる100年。縮まっていく100年。どっちに縮まっていくのか、真ん中で止まるのか、下が上の方に行くのか、上が下の方に行くのかわかりませんが、平均がそのぐらい。そうなりますと、日本の今のみなさんの生活はできなくなります。おそらく、先ほども言いましたけど、「なぞる力」だけでは格差は埋められないだろうと思います。

そこで、どんな力かということのを頭でっかちの頭で考えてみますと、仮説を構成していく能力、こうすればこうなるはずだという「仮説を構成・構築して、それを実現していく能力」を持たない

と、おそらくこれだけの賃金格差は維持できなくなるだろうと思います。

自分たちのラインにのった仕事をやる場合に日本人のやる形と外国諸国がやる形では、30倍くらいの開きがあるわけですから、その中では、日本の今の所得というものは維持できない。お分かりですよ。仮説を構築して構成してそれを解決していく能力を持たない限りできない。これは、経済で言うと「ビジネスモデルをつくる力」だと思うのです。ビジネスモデルとはどういうことかというところ、「起・承・転・結」ではないのです。「起・承・転・結」の4拍子で学習していると思うのですが、「起・承・転・結」ではないのです。どうも、3拍子の気がしております。「ピッ・ポッ・パッ」「ピッ・ポッ・パッ」という形で、ビジネスモデルというのは流れているような気がします。この「ピッ・ポッ・パッ」については、懇親会の席で話す機会があれば話したいと思います。

それでは、仮説を構成していく力、構築していく能力とはどこで育てていくのかということですが、学校の役割が重要だと思うのですが、それはやはり「読書」だと思います。本屋へ行くと高いものでも3,000円で買えるんですけども、あの中身を3,000円で買えるというのはとても安いです。本を書いている人というのは、精査して心をとぎすませて文章を綴っているわけですから、子ども達には「本を読む力」を付けていてもらいたいです。

それと、あと大人になった時に「世間話をする力」を付けていてもらいたいです。世間話をする力といっても井戸端話ではないですよ。全然違う階層の人たち、全然違う職業の人たちと1時間でも2時間でも話していただける力です。ひょっとしたら、私たちにも、先生方にも必要とされる力かもしれません。世間話をする力。変な風に伝わっちゃうといけないのですけどもね。

あと、もう一つはアジアを堂々と見る力だと思います。どうしても日本人の場合、明治維新のショックがあるのかどうか分かりませんが、西洋を気にして、みなさんは違うと思いますが、たいてい男どもが悪さをしてくるのは東南アジアなのです。アメリカやヨーロッパで悪さをして来る人はいないのです。でも、アジアを観光ではなく実際に仕事などで本当の奥へ奥へと入っていった時に、ア

ジアのダイナミックさ、彼らのダイナミックな思考方法や生きる力というのが、日本以上に力を持っているのです。当たるかどうか分かりませんが、あと20年・30年したら、ベトナムと日本の経済力はおそらく逆転しますよ。それだけのダイナミックさというのをベトナムは持っています。

何を言いたいかといいますと、日本人は絶えず肌の白い所との交流をしたがるのです。アメリカやヨーロッパなどですけれども。でも、日本人が英語を母国語としている所に行くと、劣等感を持って帰ってくるのが関の山だと思うのです。東南アジアの人たちというのは英語力が非常に高いです。同じアジアの中で生きていくわけですから、できれば日本と東南アジアの子ども達が交流して、ともに学んでいる英語で話しているという仕組みができると、少しは東南アジアから尊敬される日本になるのではないかなと思っています。

吉田：ありがとうございます。賃金格差をうめる力は「仮説を構築する能力」である。その能力とは「読書する力」「違う職業の人と世間話をする力」「アジアの方から生きる力を学ぶべきだ」というお話をいただきました。懇親会のおりにも深くお話を伺えればと思います。続きまして、三瓶様お願いします。

三瓶：私、とある講演会でパネリストをやらせていただいた時、「館山小学校の5年生、35人中7人の1/5しかウミホテルを知らなかったということに危機感を感じました。」ということをお話しました。すると、ちょうどその会場に来ていた国交省の永井室長さん、やはり国の目で見ているなど感じました。すぐに館山市の校長会で話をしてくれと言われました。館山市の全員の校長がいる前で会合が始まる前に話してくれと言われて話をしました。

子ども達は高校を卒業すると都会へ出て行きますけど、その都会へ出て行く前に、地域の素晴らしい自然や文化をぜひ子ども達に知ってもらいたい。子ども達に教えてもらいたい。そして、知るだけではなく、ぜひ体感させてほしい。子ども達にぜひ体感してもらいたい。そして、地域を出て都会に行った時に、自分のふるさとのことを自慢できる子どもを育ててほしいなと思っています。これから、毎年どの市町村も人数が少なくなっていくと思います。15年先・20年先に、育てた子ども達がUタ

ーンして地域に戻って来た時に、私も色々町づくりに微力ながら協力させてもらっていますけども、町づくりに参画していけるような子ども達を今から育てていかなければいけないと思います。これから人が減ってお年寄りの割合が増えていきます。15年先・20年先の町づくりのことを考えて、ふるさとを自慢できる子ども達を育ててほしいなと思います。

吉田：ありがとうございます。子ども達が高校を卒業し、ふるさとを出るまでに、町を自慢できる子ども達に育ててほしい。そのためには、自然や文化をしっかりと体感できる子どもを育ててほしいというお話でした。ありがとうございます。それでは最後になりましたが、芳賀様お願いします。

芳賀：先ほどの加藤さんの話とリンクする所があると思いますが、私自身ほとんどこちらにおりませんで、1週間に多くて1日、数時間という時もありますけど、ほとんど飛び回っております。仕事は、半導体とか液晶とか最近ソーラー関係もあるのですけれども、そういう所から排出される排ガス、危険なガス、毒性ガス、可燃性ガス、温暖化ガスというものを処理する装置を作ったり、メンテナンスをしたりしております。その関係で海外の方も、韓国・台湾・マレーシア、これらの国とつきあいがあまして一緒に仕事をしております。

日本人を含めまして我々アジア人としての仕事結構ありまして、その中で、現場でどんなものが求められているのかというお話をしたいと思います。1番必要なものは「自己管理能力」です。自分で分析・判断できるか。そして、その結果から検証できるかということが一番大事です。我々の仕事というのは、だいたい7割から8割ぐらいが失敗です。ほとんどが失敗です。その失敗から学べるかどうかです。失敗せずにきちっとやろうと思うと、ほとんどついていけないです。ほとんどが失敗ですから、失敗から学んで、どこが悪かったのかと謙虚に学べるかどうか第1です。

それから第2は、ユーザーに対する責任感です。これが1番求められることです。ユーザーとはお客様のことですけれども、現場に入ると同時に、一緒に課題をどう解決していくのか理解してもらい、仲間になれるのです。そういう感覚が持てるかどうか。それから、自分の持っている理論とか知

識とか数少ないわけですから、自分なりの理論をネットとか文献を使って、きちっと展開できるかどうか。つまり、常に学んでいかないとこの世界はやっていけない世界です。我々は本やインターネットから、そうとう情報を集めるのですけれども、本でいうと、だいたい3日に1冊ぐらいのペースで読まない、とともついていけないです。ネットも、海外からの情報も含めて、毎日集めていかなければならないという状態です。

それから、第3はコミュニケーション能力です。日本国内にもお客さんがいるのですけれども、組織関係が全部違います。例えば、A会社では、課長さんレベルでも重大な決済能力を持たないです。でも、ある会社に行くと、下の役職でも何でもできるのですよね。決済権を持っているのです。そういう人間関係をきちっと見ないと、仕事ができないのです。色々話をしても、最後に「上司と相談します」というレベルで話をしていると、膨大な時間を浪費してしまうということです。人間関係を見る力が必要だと思います。それから、もう1つは、海外との関係では、英語がベースになるということです。英語の発音は、話す人によって全然違います。本当の英語は何だというぐらい発音がバラバラです。でも、ほとんどの人が自信を持ってやっていますから、本当に発音がきれいではないと通用しないということはないと思います。ただし、コンピューターは英語を話すという関係がありますから、英語がベースになっているのは事実ですので、きちっと学ぶことが大事だと思います。それから、専門用語や否定なのか肯定なのかをはっきり言えるかどうかです。アジアでは、中国語が必要になってきます。どこの国に行っても、中国人はかなり経済的にも人口的にもウエイトを持っていますから、中国語がある程度使えないと、おそらくスムーズなコミュニケーションはできないと思っております。実は、コミュニケーションで一番大事なものは、家族とのコミュニケーションだと思います。出張が多い人は、だいたい離婚が多いです。家族をきちっと大事にしない人は、家族がバラバラになって仕事をやめていくパターンが多いです。

それから、一番言いたいのは第4番目ですけれども、生活の習慣です。生活がどうしても不規則になりますから、食事やアルコールやタバコなど

を自分で制御できないと、挫折する傾向が強いです。決められた時間内に報告書を作成して検討会をやったり、経過報告をしたりすると、1つだけやるのではなく、複数追い回さなければならぬんですよね。ですから、かなり生活習慣の所が鍛えられていないとつらいです。

我々の場合、報告書というものは、だいたいA4の紙1枚にまとめなければならないのです。何枚にもなるということは、まとめられないという証明になってしまいますので、必ずA4で1枚にまとめます。最初に結論を出し、その結論に至った根拠を示します。そして、どうしても資料が必要な場合には、別件で出すのが普通です。それをやるには、どうしても、朝型の生活習慣をつけないとダメなのですよ。夜は、お酒とか飲んだらいい答えが出ないので、早めに寝て朝やると。私の場合は、いつも4時か5時ぐらいには起きて、それから仕事をして報告を出す。ですから、大事な報告は必ず朝作するというパターンがないとおそらくつぶされてしまうだろうと思っています。これは、私の経験からの話ですので、全部共通して言えない部分もあると思いますので、それだけは付け加えておきます。以上です。

吉田：ありがとうございます。身に付けさせたい力というのがたくさんあって、どれも大切だろうと思いました。「謙虚さ」や「責任感」ですとか、「常に学ぶ」、「情報を駆使しながら」ですとか、「人間関係を見る力」ですとか、本当にたくさんありましたが、「自己管理能力」に関係するお話がたくさんあったかと思いました。5名のパネリストの方たちには、柱1・2に対しまして、大切なメッセージを送っていただきました。ありがとうございます。本当に、ご自分の経験をもとに素晴らしいお話であったと思います。それでは、柱3の方に移らせていただきます。

館石：それでは柱3に移らせていただきます。これまでのお話をもとにいたしまして、「学校の果たすべき役割、教員に期待すること」の視点でお話をいただきたいと思います。伊藤様よろしく願いいたします。

伊藤：まず、私としては少しでも地域に貢献できる学校にしていきたいと考えています。やはり学校の中だけでやっている時代ではないなど。外から見て学校が何をやっているのかどんどん発信

していかねばならないと思います。こちらの資料を見ていただけますでしょうか。私の学校ではこんなことをやっていますというのをご紹介したいと思います。まず、南房総市のご支援をいただきながら、「花いっぱい運動」という活動をしています。本校の生徒・職員が、南房総市の小中学校の先生方に来ていただいたり、こちらから伺ったりして、種まきからポットへの植え替えなどを行っています。本校から発信して、南房総市の小中学校を花いっぱいにしようというものです。それぞれの小中学校が創意工夫をして花壇づくり等の活動に生かしていただいています。ときには生徒が先生役をすることもあります。次に、警察と連携して生徒が作った花や大根を国道128号線で交通安全を願って配る活動をしています。なぜ大根かというと、食あたりしない食べ物ということから、車に当たらないという語呂合わせです。最後にヨーグルトですが、学校給食に出しています。出すだけでなく、生徒が母校にお邪魔して、こうやって作っていますという説明を加えてお配りしています。このように生徒が関わって活動していると、自分が何か役に立っていると感じたり、喜んでもらえることが多い。そのことが生徒の自信になり、自己有用感につながっていくのだと思います。これは和田中の話なのですが、和田中と学校開放講座というのをやっています、数学とか情報とかの教科を、一緒に学ぶ地域の方はいませんかというものです。この中には8年間数学を生徒と共に勉強している人もいます。一人の方は農家で小さい時から勉強するなら仕事しろという家庭で、勉強したくてもなかなかできなかった方です。もう一人は数学が好きで好きでたまらない。この人たちが生徒と一緒に勉強するとすごい。まさに生涯学習の生きた見本がいっぱいあって、こんな年輩の方でも勉強するのかと、感銘をうけております。

次に、よく学校の教育力、家庭の教育力という話がありますが、ひとつ非常に思うのは、もうひとつ大事な教育力、生徒自身が持っている教育力です。たとえば先ほどお話ししたように生徒が何かを教えるときというのは、自分が持っている教育力を発揮しています。あるいは生徒のお互いの学びあい、これは小中学校でよくやられていると思います。高校教育は義務教育に学べと言われま

すが、そんな生徒の持っている教育力をいろいろなケースで発揮させている学校は、活力のある学校だなと思います。

また、地域の教育力、いろいろな方々をよんでフルに活用したい。調理の授業では富浦ロイヤルホテルやアクシオンのシェフに定期的に来ていただいたりして、授業に組み込んでいます。話が飛んでしまって申し訳ないですが、小中高での交流もしています。学校の枠を超えるというのも必要だなと。小中の交流はよく聞くのですが、なかなか小中高の交流というのはない。そのあたりも必要かなと思っております。

最後に教員に期待することということです。私ももう何年もなく退職します。一つ思うことは、自分の思いは教育長であろうが誰であろうが絶対言わなければいけないと思います。「こうしたい」という思いがあるはずです。これを言ったら失礼だとか、言っても駄目だとかそういう風に思わず、とにかく言う。これはすごく大事だと思います。いろいろ言って、最終的には上司の判断になるのかもしれませんが、まず言う。そういう思いを期待していると思います。伝えてくれることを。それでやれることであればぜひやっていただきたい。特に若い先生方に期待します。

あと、よくアイデアを出せと言われます。しかし「金がない、金がない」といつも言われます。でも以外と学校というのは金がなくてもいろいろできるのです。金がないなら金がないなりに何とかやろうとする。結構できるのです。

最後に一言。若い先生方、ちまちました教員にはならないでほしいです。ガンっと行ってほしいです。ということで終わりにします。ありがとうございました。

館石：ありがとうございました。笑っているのは私たち二人だけだったでしょうか。では青木様よろしく願います。

青木：はい。まず学校の果たすべき役割ですが、私が思うに、学校というのは地域の中心であるべきだと思います。小学校であれ、中学校であれ、高等学校であれ、何か災害があったときには緊急の避難場所になり、そして何かあったときには学校を中心に地域がまとめられるような、常にいろいろな地域の中心となるのが、学校の果たすべき役割だと思っております。ですから、その中には生徒

へのサポートは勿論、地域へのサポートもあっていいと思います。ただ、学校の果たすべき役割は年々変化しております。まず生徒には、とにかく今やるべきことは何なのかを考えさせることが大切だと思います。指示待ちの生徒に「はいこれやって、次これやって、じゃあ次これね」と道を全部示してあげるのではなく、何をやるかを宣言させるようにしています。「あなたは今何をやらなければいけないの?」「えっと、これです」「じゃあ次は?」「これです」というように、やるべきことは何かを考えさせて、宣言させて、実行させるというのを今取り組んでおります。進路についてはとにかく方向付け、自分が何をやりたいのか、親が何を望んでいるのか。そういうことを方向づけることをサポートしています。これやりなさい、あれやりなさいではなく、サポート方式です。

それから、道德教育というのが高等学校の方でも導入しなさいという風に言われています。すべての教科、クラス、部活動すべての部分で道德教育を意識することも、学校の果たすべき役割として校内で取り組んでいることです。ここで、長狭高校の取り組みを紹介させていただきます。拓心高校のようにヨーグルトも花も作ってありませんが、本校といたしましてはそれに代わるものとして、5年前までパイロットハイスクールというものに取り組んでおりました。これは地域リーダーを育成するプログラムです。将来地域に帰ってきて、地域のリーダー、地域の核となるべき人材を作るというのが目的です。また、最近では開かれた学校づくりに取り組んでおります。地域の方々に学校で取り組んでいることを発信することにより学校に来ていただき、家庭の方では、5~6年前までは考えられなかったことですが、昨年度から高等学校の体育祭に保護者OKにしました。保護者の方も意識が高いのか、ものすごい数が集まりました。昨年はぼつぼつだったのが、今年はお仕事をお休みになって、ビデオとカメラをお持ちになったお母様方がたくさんお見えになりました。地域にも、家庭にも開かれた学校づくりをアピールしております。

私も教員生活今年で28年になります。実は今教え子の子どもが高等学校に入ってきております。「先生、うちの子、今年高校生」というお母様方も増えてきました。その中で、自分が取り組んで

きて、今いらっしゃる先生方にメッセージとして伝えたいものが、いくつかあります。先生方は、日々お忙しい毎日を過ごしていらっしゃると思います。ただその中で、まず「自分の売り」を作っていたらいいと思います。私は、教員の最初の10年ぐらいは何をしていいのかわからなくて、ただただ言われることをやっておりました。バスケットボールの部活がすべてのウエイトを占めておりまして、実は授業よりもバスケット。バスケット、バスケットというように、非常に重荷でもありましたが、子どもをおぶってママコートを着て体育館に足を運んだりとか、ハイハイをしない子どもを毛布の上に乗せて指導をしていました。しかし、バスケットボールでインターハイに連れて行けるかというところもありません。それなら教科で何かやりたいなと思い、そこから得意分野である作文や短歌俳句、詩の創作活動などを生徒に指導していきました。ただやらせても生徒は「えー、面倒くさい」になってしまうので、「さあ、これを全国に応募するよ」「これで賞金稼ぐよ」と言いながら生徒をやる気にさせ、生徒がどんどん賞をとりながら自信をつけていきました。賞状1枚もらう、2枚もらう、それが生徒の自信につながっていきますので、何か自分の売りに、これだけは負けないぞ、これだったら生徒を伸ばしてやれるぞ、というものを見つけて、自分の中に作っていただきたいと思います。そういう子どもを伸ばしてくれる先生に、親は非常に協力的です。これは自分の実感として感じております。この先生に持ってもらうらうちの子は伸びるぞ、うちの子がいい子になっちゃうぞ、という風に思えると、保護者が非常に協力してくれます。そこを逃さずに家庭を巻き込んで、作文を書くのを嫌がる生徒を、家庭の方から後押ししてもらおう。こういったこともテクニックの一つとして、先生方にお知らせしたいと思います。どうやったら今いる学校で自分が役に立てるか、自分ができることは何だろうと考えながら日々取り組んでいただくと、きっとそれが何年かして自分のもとに戻ってくると思います。以上です。

館石：ありがとうございます。加藤様、よろしく願いいたします。

加藤：学校の先生って、1回も卒業していませんよね。1回も卒業せずに学校にいますよね。学校

って地域から独立というか孤立してしまっているのではないですか。これはガラパゴスと同じですよ。もう進化が止まってしまっていると思います。小学校の先生と話しますと、思考方法が小学生と同じなのです。中学校の先生と話すと、思考回路がほとんど中学生と同じ。高校の先生は……。結局人間って環境の動物なので、子どもたちと接していると、先生の考え方は子どもたちに伝わるでしょうね。でも子どもの環境が全部自分に入り込んでしまうようで、あまり魅力的な先生という人にお会いしたことがないという状況です。今日ここに来まして、実は4人の先生から名刺をいただきました。共通しているのはメールのアドレスが入っていない。南房総市も金があるわけではないのですが、市の職員は「金がない」で思考を止めることが多いのです。予算がつかなかったとか言うのです。そういう職員には「ばかやろう」と言うのです。金だけがない状態にまでしてから金がないことを嘆けとよく言います。あと金だけだよなという状態にさえできれば、金ってどこから降ってくるものです。金がないということで思考を止めたら金が入ってこない。金だけがないというところまで自分を追い込んだら、金がついてくるというのが、公務員をやっているところですよ。

最後に申し上げますと、高校はもう私立のほうにどんどん上澄みの子どもたちが行っているというお話を聞いていて、困ったなあと思っているのですが、義務教育だけは唯一まだ民間の学校が進出してきていませんから、子どもたちを抱えているんでしょう。でもそのうち親がだんだん気付いてきます。今1人の子どもを6人の親で育てています。1人っ子的場合、両親、両親の父と母合計6人で育てています。いわゆる金銭的な余力も付いてきますから、いつか私立の小学校や中学校などが進出してきたときに、皆様方の学校の評価というのはかなり変わってしまうのかな、というような気がします。結論として何を言いたいのかというと、先生一人ひとりが社会人としての競争に耐えていく、社会の中に入って行って、社会の中で生きていてもらいたい。ガラパゴスに子どもと一緒に閉じこもって、時間の軸、概念の軸がどんどんずれていっているわけですから、このままいったら結局は自分たちの島が地球温暖化によっ

てどんどん狭まって、最後にはどうなるのでしょうか。それを心配しています。行政としては、拓心高校は南房総市唯一の高校ですので、これからもどんどん一緒にやれることはやって、お金を出せることがあればどんどんお金を出していきたいと思っております。それは、今回校長先生の魅力に触れて、思いを強くしたところです。みなさんも、できれば社会人として、社会の中の人と付き合ってみる、そういうことをされるといいと思います。ただ、学校の先生は忙しいですね。私も大学を出られたら教員になりたかったと思っていたのですが、ならなくてよかったと思っております。どうもありがとうございました。

館石：ありがとうございました。三瓶様よろしくおねがいたします。

三瓶：私は逆に、学校の先生だけが忙しいとは思っていません。学校の先生が忙しいのは、一昔前の話だと思っております。私はいろいろな活動をやっています。私は会社員です。総合学習が始まってから半端じゃありませんでした。学校から声をかけられると、クビを覚悟して休暇を取って、子どもたちに対応してきました。そういった私の活動から通して、今学校の先生が忙しいというのは、先生方がそう思っているだけだと思います。今世界はすごく厳しいです。企業も、商売をやっている方も半端じゃないぐらい厳しいです。土曜だって日曜だって仕事があれば会社に行って働いています。昼も夜も、24時間働いています。「学校の先生は忙しい」と言われるのは、一昔前の話だと思います。それは置いておいて、私は先生方にもっと地域のことに興味を持ってもらいたいと思います。私たちは館山市とタイアップして、年間を通して第1土曜日に観察会をしています。ですから参加しようと思えばいつでも参加できます。館山小学校の35人の児童を受け持っていた先生ですが、とある会合の最後に話をさせていただきました。「私たちがウミホテルの観察会をやっていることをご存知でしたか」と聞きましたら、「知っています」というんです。「でも関心を持つまでには至らなかった」と。ですから児童が5分の1しかウミホテルを知らなかったのです。私はそう受け取りました。ですから先生方にはもっと踏み出してもらって、関心を持ってもらいたい。

先ほどの、学校の方から「開かれた学校」とい

う風におっしゃっていますが、私はクビを覚悟して休暇をもらって子どもたちに対応してきました。そういう私の気持ちから見ての、「開かれた学校づくり」を推進していくための提案です。特に校長先生にお話ししたい。開かれた学校づくりを推進していくためには、学校の先生も「お互い様」という気持ちで地域にもっと出てきてほしいと思います。地域ではボランティア活動などもたくさんやっています。地域の人を学校に呼んで子どもたちにやってもらおうと思ったら、どうぞ学校の先生方も地域の活動に参加されて、地域の方たちももっとコミュニケーションをとっていただきたいと思います。そうすればもっとスムーズに「開かれた学校づくり」ができると思います。校長先生は是非先生方にそういう風な話をさせていただきたいと思います。先ほど、加藤さんは公務員ですから、やさしい言葉でおっしゃっていましたが、私たち一般人から言わせると、「学校の先生は社会性に欠けるね」という言葉をずいぶん聞いています。子どもたちに校外学習をさせるなどいろいろな活動があると思いますが、ぜひそのような気持ちを持って、地域にも出てきていただきたいと思います。

館石：ありがとうございました。芳賀様、よろしくおねがいたします。

芳賀：なんか言いづらい雰囲気なのですけども。私自身の考え方は少数派の意見ですので、一般的な意見じゃないと思ってください。先ほどの話とも関わるのですが、大学を卒業していないといけないというのは、本当に幻想です。私自身の資格は大学4年中退、もっと言いますと、教育実習に行ってきた翌日に中退届を出して、仕事に入った人間です。ですから学歴で言うと高校卒になります。日本は資格社会です。必要な資格が結構あります。取らせて責任を持たせる資格と、取らせることによってある程度の権限を持たせる資格と両方あります。この業界にいますと、普通4つか5つの資格は最低限必要になります。私の場合は今20ぐらい持っています。それは本当に必要な資格でして、会社の金で勉強して取ったというものがほとんどです。アジアに出ますと、アメリカとかヨーロッパとか日本の大学を卒業したという修士とかドクターの資格を持っていないと、就職もできないのが現状です。ところが彼らが現場に来る

かというところではありません。彼らはいわゆるデスクワークで、現場に来るのはいわゆる安全教育も受けていない人たちが来るからとても危ない。これがアジアの工場の実態だととらえています。握手をしても、偉い人は本当に柔らかいぶよぶよの手です。現場の人は何のために働いているかというと、そういう偉い人や、もっといい条件の会社に移るために仕事をしています。だから熱心さが違います。ところが日本はどちらかというとサラリーマン化していて、「言われたからやります」「こう言われたからやりました」「結果は上に聞いてください」のような対応です。出世に対してどう考えているかというと、本当に異常です。どちらかというと、出世はしない方がいい。気楽に今の給料で十分だよ、という人が今6割~7割かなと思っています。中には出世のために頑張っている人もいますが、一般的にはそういった現場が多いなと思っています。そういう現状の中で、これから学校にどういうことを求めたいか。1つは、学校は学習の楽しさを教えるところだと思います。教科が圧倒的に多すぎると私は思います。海外の学校を見させていただく機会があったのですが、教科が少ないです。しかしその分じっくりと考える時間を持てるような学問の体系になっています。もう一つは、この世界では4~5年に1回、いわゆる現実というか真理が置き換わってしまう。昔はこう教えましたけど今は違いますというものが圧倒的に増えています。これは量子学問が発展した結果だと思います。このことを考えると、柔軟性を持った思考力がない人はだめなのです。特に専門的な理工系の大学を出ている人は、変に自信を持ってしまって柔軟性がないのが現状です。私のような中途半端な人間のほうがむしろスポンジが水を吸収するように柔軟に仕事ができと思っています。ですからそういった柔軟性をどうやって身につけさせるかが一番重要だと思っています。一番私がお願いしたいのは、もっとALTを活用していただきたい。それから中学生までですと部活が非常に大きなウエイトを占めているのが事実だと思います。ところが部活が過疎化という名目でだんだん減ってしまっている。ですからこの際思い切って、安房地区の部活動は2部制にしたらどうかと思います。冬場は陸上系、春から秋にかけてはボール系の部活をする。基礎体力をつ

けるといふ観点からみると走るといふのが基本だと思いますので、安房の部活動は2部制になっていますよ、というぐらいの勢いがほしいなと思います。あとは学校に対して地域が支えるいわゆる学校協力体制を今後作っていくべきかなと思っています。PTAだけでなく、学校に関わっている人たちが全て、労働力、資金含めて学校をバックアップしていく。昔のように学校が最先端の情報基地になるというようなものをぜひ作ってきたいという希望を持っております。以上です。

館石：5人の方々からそれぞれ貴重なご意見を伺うことができました。それでは、今までフロアで聞いてくださったみなさん、いろいろと感慨深いところがあったと思います。質疑の時間にしたいと思います。

滝口：鴨川市立長狭中学校に勤務しております滝口といいます。青木先生に質問したいと思います。先生は、学校の役割として地域の中心であるべきとおっしゃいました。今、自分が勤務している学校は、長狭学園として小中一貫校で大山小と吉尾小と主基小が合併して、そこに長狭中学校がくっついた形になっています。合併する前にいろいろ話し合いが持たれて、大山小と主基小が廃校という形で合併になって今うちの敷地にあるのです。特に小学校は地域との関わりがとても深く、その地域の中心であるべきと先生がおっしゃった学校が無くなってしまふという現実が今起きてしまっています。平成23年度には江見中学校と鴨川中学校が統合して新しい中学校になるということで、今どんどん統合という流れになってきているのですが、学校を統合することで地域の中心にあったものが無くなってしまふことについてどうお考えかお聞きしたいと思います。

青木：とても大事なところだと思います。実は学校が地域の中心というのは、小学校が一番ですね。じいちゃん、ばあちゃんも、父ちゃん、母ちゃんも、子ども達がまたその小学校に通うということで、本当に小学校学区というのがすべての地域の中心になると思います。それが統合で無くなってしまふというのは、実は非常に悲しいのですが、子どものことを考えると、あんまり少ない人数で育つと子どもが今度中学校へ行った時にカルチャーショックを起こすであるとか競争力が身に付かないということがあふわけです。そこは今、長狭

地区の統合したところを今度は地域の人達が地域の中で「今までの私たちの中心は、旧大山小学校だった、旧吉尾小学校だった、旧主基小学校だった、でも今はここになったよ」ということで、長狭中学校のあの位置を中心として広く考えてもらうように、いろいろなところで話をしていたらどうでしょうか。高等学校もそうですね。OBなどからしてみると母校が無くなってしまうというので、それは非常に悲しいことですし、私も安房南高校が無くなってしまって、安房南高校の同窓会のお母様方の嘆き悲しみを直に受けまして、これは大変なことだと思いました。が、今度は地域の高校として安房高校をサポートしていくほうに回って下さいということで、南高校の同窓会のお母様にはお願いいたしました。そこでやはり同窓会の方々も「そうですね。無くなったのじゃなくて一緒になったと考えて、安房高校をサポートしていきます。」って言うていただきましたので、今度は地域が広がった、メンバーが増えたという意識で地域の方にサポートしてほしいということを学校側から発信したらいかがでしょうか。

滝口：はい、ありがとうございました。

館石：ありがとうございました。伊藤さん、どうぞ。

伊藤：今の話の中で全く青木先生のおっしゃる通りだと思いますが、小学校が3つあってそれが統合した、と。それぞれの小学校の特色とか持ち味、よさがそれぞれあると思います。それを統合校に吸収して、さらにグレードアップしていくというか。確かに学校が無くなることは地域にとって寂しいことです。実は私も御宿高校で教頭をやっていました。その時に御宿高校と勝浦高校の統合の仕事も入っていました。私は最後の御宿高校の教頭でした。その時は、御宿町から学校が無くなってしまふ。勝浦市には学校が残って、御宿町は町そのものから学校が無いということは非常に辛いことでした。もちろん町を挙げて、県に反対の申請を同窓会がした経緯もあります。それぞれの学校のよさや特色を統合校に引き継ぐという形が子ども達のためになるし、地域のそれぞれのよさを生かすことが大事なのではないかと思います。

館石：ありがとうございました。他の視点でいかがですか。

西田：館山二中の西田と申します。今日はありが

たうございました。我々が求められることというのをいろいろお聞きしました。つい、私も忙しいということで怠けていた面もあったと反省しなくてはいけないと思いました。それで、パネラーの皆様が家庭や保護者の方に望むことは何か、一言ずつお聞きしたいと思います。

伊藤：保護者に求めることはいろいろあります。答えにならないかもしれませんが、学校側が保護者にいろいろな情報を出して協力を求めることが大事だと思います。例えば携帯電話のことです。さっきも出ましたけれど、いろいろな子どもに関わる学校の課題がありますよね。そういうものを私たちが本音で話すような機会というか、どうしても保護者の方は、言葉は悪いですが、人質をとられているという意識の中で、なかなか学校に足を運ぶのですが学校に言えない。ただ、携帯の問題一つとってもサイバー犯罪とか、メールでの嫌がらせとかいろいろなものについても、学校だけではなく保護者も関わらないと。そのためには本音で話す機会が必要なのではないか。保護者と学校・教員ががっちり手を組めば、こんな怖いものはない、こういう話がありました。ある高校の先生は、学級担任になったときに必ず親と学級懇談会が終わったあとに全員と飲む機会を持ち、そこから始めるという先生がいらっしゃいました。私はやったことはありませんが。いずれにしてもそういう本音で話し合う中で、親は子どもを何とか一生懸命いい子に育てたい、学校の我々もこの子を何とか成長させたい、ともに同じ思いなんです。土俵は同じなのです。だから、そういったところから話し合っているいろいろな課題に立ち向かいたいと思います。

青木：私は子どもが二人おります。ある意味教員の立場と保護者の立場というのがあります。上の女の子の方はあまり問題なかったのですが、下の男の子の時は小学校の先生、中学校の先生に平に平に本当にご迷惑をおかけした息子でしたので、きっと小学校、中学校の先生達は「親は何をやっているんだ、ここのうちの親は」って絶対思っているだろうなという意識を持ちながら、常に学校には平身低頭で、頭を下げつつ行っておりました。学校として家庭に求めることは、やっぱり躰の部分です。教員の立場としては、学校に全部お任せではなく、「それは学校ではなくおうちでしょう。」

ということを家庭でやって欲しいなと思います。

「先生、私が『おはよう』って言っても、うちの子『おはよう』って言わないのよ。先生から言ってやって」というのは違うだろう。その区切りをつけてくださいということが家庭に求めるべきではないかと思います。家庭でやること、それは家族で指導すること。学校ではここまでですというのが、あっていいと思います。今、何もかもみんな学校でお願いしますとなっていますので、そこは区別をつけるということです。

館石：加藤さん、一言でお願いしていいですか。

加藤：やっぱり学校に全てを求めるのは無理ではないですかね。学校に求めたって答えは出ませんから。ただ、親の立場から言いますと、子どもを育てていたときに抱えすぎないでくれということをお願いしました。大変失礼な言い方ですけども、子どもの生活というか知識というか、そういうものを失敗しながらやっていくのだから学校があまり抱えないで、できるだけ早くうちに返してくれということをお願いしました。やはり保護者に求めるのは、学校というのはすべて求められたら困るということを言われた方がいいと思いますね。

館石：ありがとうございました。三瓶さん、お願いします。

三瓶：これからもっと子ども達を地域に出して体験させるとかそういった機会が増えてくると思います。総合学習とかそういうことで。私は、こういった機会に声をかけられていつも話しているのですが、私は社会に世界をつくらなくちゃいけないと思います。私たちはいろいろな活動をやっています。そして、その中でいろいろな注意をして子ども達にします。例えば、海辺を案内するときに走らないんだよとか岩場は滑るんだよとかと言っても、自分勝手な行動をして滑ってけがをしてしまったりする子どもが出てくる。国土交通省の港湾局が「海辺の自然体験」を全国展開するときにたたき台を作るのに茨城県の大洗市と館山市の2つがモデル市町村に選ばれて、私も声をかけられてやってきました。千葉市のとある中学校に行って話をしたとき、校長室にPTAの人達もみなさんいまして、そこで、「今、国土交通省が全国的に計画しています。自然学校というのをやるのに、今たたき台を作っているのですよ。」と言ったら、校長先生が腰を引いちゃったのです。海

辺での活動では、即シュノーケルのことが出てきますから、死につながってしまうというような内容です。ですから、校長先生が腰を引いちゃったのです。今、何でも保護者が出てくるのです。特に、海は即、死ですから、本当に腰を引いちゃったのです。私は、その会合でも言いましたけど、学校も子どもをけがさせちゃいけないといろいろな対策を立てて、子どもにも言って、先生方も注意して、もちろん私たち団体も本当にできるだけのことをして子ども達を案内するのですが、勝手な行動をしてけがをすることがとても心配のようです。だから、ここから先は自己責任だよということを社会に作ってやらないと、学校のそういった活動もなかなか進まないと思います。学校の先生からなかなか言いづらいかもしれないですけども、ここから先は自己責任だよということを子どもだけでなく、保護者の方にもそういった意識を持ってもらうことが必要だと思います。

館石：ありがとうございました。芳賀さん、締めてください。お願いします。

芳賀：私は、中学の3年間というのは子離れ・親離れの3年間でなければ、高校卒業後、恐らく失敗すると思っています。私は、欧米の価値観というのはあまり好きではないですけども、唯一好きだと思うのは、大学というのはだいたい自分の金で行くっていうのが普通なのです。ところが、アジアというのは親が最後まで面倒見てあげる。就職、結婚、家まで面倒見るといって、こういう傾向がかなりあって、やっぱり親離れ・子離れが全然できていないところがかなりあるのではないかと。ですから、小学校まではベタベタでいいと思うのですが、中学校3年間は家庭では親離れ・子離れの3年間としなければ、ちょっとやっぱり何をやっても無駄だろうという気はします。自分たち、実生活から言うと失敗や成功もあるのですが、それが一番大事だったかなというのは強く感じます。

館石：ありがとうございました。はい、三瓶様お願いいたします。

三瓶：その他のご意見というのがあって書かせていただいたのですが、ここ5・6年、県が主催する初任者教育というのを頼まれてやっています。毎年参加する人は違うから同じ事でいいからやってくださいと言われてやっています。そこで話し

ているのですけど、そこの学校の子どもの有り様は、私、素人の目ですけどもトップ次第だと思うのです。そこの教室の子どもの有り様は、担任の先生次第だと。いい学校はたくさんあるのです。私が行っている夜空の観測会の後、先生方に「すばらしい学校ですね。」と言います。でも、この学校に子どもを通わせている親御さんはかわいそうだねと思うこともあります。ですから、私はその学校の子どもの有り様は校長先生次第だと思います。夷隅郡市の校長会、前校長会でも私はこの話をしました。私はいつもそう思っていると。そうしたら、ある校長先生があとで「校長だけの問題ではないんだよね。」と私に言ってきました。その校長先生の気持ちは私も分かります。いい学校はたくさんあります。ですけど、自分が担任している生徒の有り様は、担任の先生次第だと思います。

館石：耳の痛くなるようなお話で、最後締めていただきました。普段、こういう5人のような方々と私たち教員は接することが少ないです。今日、私たち所員は大変貴重な経験をさせていただくことができました。子ども達に生きる力をつけるということは、一言で言えばとても簡単なことなのですけども、それがやり方は大変様々でありますし、これから私たちがやっていくことについては、本当に試行錯誤していかなくてはならないと思っております。私たち研究所の所員一人ひとりが一生懸命考えて、今日のお話を無駄にせずに各学校に持ち帰り、また、私たち所員同士でどうしたらいいかということを考えていく貴重なご意見をいただくことができました。本日は、もっともっとお聞きしたいのですが、時間が迫っております。予定時刻を過ぎておりますので、大変申し訳ありませんが、以上で教育座談会を閉めさせていただきます。本日は、本当にありがとうございました。

それでは、所長の石井よりお礼の言葉を申し上げます。

石井所長：パネラーのみなさん、ありがとうございました。お礼の言葉はできませんので、私の思いのたけを伝えさせていただきたいと思っております。

義務教育は生涯学習、生涯教育は義務教育がその基礎を培うということでございます。また、私たちは、パネラーの皆さまからご指摘いただいた通り、地域の皆様と話し合う機会があまりない状

況がみられると思っております。千葉県の「学校教育指導の指針」にしたがって対応している、ということがまますと私も反省しております。

私の学校の例を話しますと3,500世帯があるのですが、学校に関わっている世帯が約8%という中で子どもたちの親御さんの話を聞いても、その他の90%以上の方の思いは学校へは直接伝わらないのです。ですから、その思いをやはり私たちはどういう方法で情報を得たらよいか考えていかなくてはいけないのかと思っております。また、本日学校教育に対する貴重なお話を伺いまして、私も大変勉強になりました。私どもの視点がやはり一方的な視点だったなあ、そんなことも反省しております。

ただ所員一同、これからが私たちの仕事だと思っております。今日のパネラーの皆様の願いは、次代を担う子ども達の豊かな成長です。私達はこの話を聞いてどうするのか、どういう教育をしていくのか、それが私たちに課せられた使命であると思っております。今日のことをもう一度自分なりにかみしめて、また明日の歩みにつなげてまいりたいと思っております。ありがとうございました。